当(穴洞)村氏神累縁記

(翻刻は高鷲古文書読ままい会による)

扨(さて) 穴洞鎮守白山妙理大権現/濫觴(らんしょう) を

また、デンザロー! III かっ!: A A Min によっ なくわし) ヶ尋ね奉れバ、昔 □上井形部左衛門尉平

良忠(ガ)夢中に出現あらせ給ふ素跡なり。

人皇六拾一代朱雀院の御宇、天慶年

総国猿嶋郡上井郷の内裏の一戦を遁と

中亡び給ふ平親王将門公の党にして下

数十里の山谷を踏分当地※落延、潜(ひそむ)に糸[犭]キギートラダィドトロンでです。

デの犬兵ケ野こ柊の屋浦(敦)をかまえ侯。名

今の伏兵ケ野に終の屋舗(敷)をかまえ候。名

を山河と改、光陰を送在の処、承久年中

置、地頭相統(すべ)レバ、此時今ノ喜八会津ュ屋武蔵権守頼保ュ此庄を上゙゙より下被(され)

敷を替へ民家に下、与四良と号候事。

去ハ天慶三年酉ノ八月一三日」夜五更。及び

良忠神告を得たり。其夢に曰ク。辱(かたじけな)々

告ッ云ク。汝能見よ、一ッの奇瑞為るべし井官(衣冠)正*八拾有余の老翁枕に立セ給ひ

急ぎ此所に一字を建べし。汝が栄

名、云、汝所見上、巧多路多一

信信与八法有金力充公科花小支是

いいっというあすしてあるとはませ

名きおがかいってをををしいって

永く守ンとの給ふ声して雪空へ消え失せ

1

欠出(かけいで)見れハ、其長三寸有余の金体の勧の高窓へ杉□き傍らを伺う処、不審なるの高窓へ杉□き傍らを伺う処、不審なるの高窓へ杉□き傍らを伺う処、不審なるの場に関落が、世白山開闢の時素澄大師腰掛石)良忠驚き

奉。伝心絡行、従」告夢:一宇建立し青赫奕(かくやく)として一ツの石上に在(おわ)す。良忠見

]] 白山妙理大権現守護所を奉ュ鎮座(鎮座し奉り)

に逢に経」年暦ョ而、

永禄年中飛

、 記型はどことは、 つっぱま、 記号に国大野郡白川郷帰雲の城主内ケ嶋兵庫

|那上郡東七郎三觜門平常先司惟(おもしばいるで介氏理其身に望みハあらね共、美濃ノ国

郡上郡東七郎左衛門平常尭同維(おもんばかるに)遠

藤六良左衛門盛数に討負、婿氏理の方へ

敗亡し氏理の太刀頼を以、再郡上ぇ本地

遂度(とげたく)ゟ被」頼候れバ氏理領掌(承)して同

国益田郡桜洞の城主三木右京太夫自総

大手搦手の軍備定相搦、候がよし。 鷲見

其外小名郷士を加勢に頼、上ノ保口、

明方口

盛数急ぎ討手として明方ロュハ遠藤清兵衛長門守朝保具に聞之、盛数方ュ告之知す。

流方多九八成教小村看,等代理大方 長门官部保具的軍之風彩方、各人知日 それ小名都士をかれのれ上海の方と る首の教務過ればもこれる事を順自は 多方多好れれば問題等して日 级己し代行行を力引を公母的上午我 引神か方のちろよろかとうそしそ 大かなけずは定われぐよし勢見 了多了多少小孩子一唇,而可福奉中克野 青蒜変していれるといまするかん 冷小を見る時見たりるは思く思い乾 以氏理思多に望いるとる表情 少大野那向は陽多の様を内底多年 白山的理大指見守護所了を活在 在一個公路打得各與了一日 建立 欠か見れ去長三寸有余の金体は前 めいの方から名に、指法の傾極のなりは好き おるるのおれき情を行かれるまるる 風むききけんでしているいななないとは 於上那東七日九八子常竟日准透 しの面だとくるるわしてるとの城代い

聞 勢セらる。 勝敗に不構給 大将自総既に敗北セしか、依之先今度ハ も不」安有し所、飛州、早撃到来して明方口 戦ふといへ共はかばかしからず。 大日浜の向に一日一夜時の矢軍いたし 志たしたと遁入ける、企パに氏理・常尭両将 勢実に而不叶とや思けん。氏理の旗本 の弓の者一百余騎向らる処、 東七郎常尭両牓 竟(ついに)永禄四年酉八月下旬内ケ嶋兵庫及 陣城として態 づつ差向らる。 谷なれども大方ならん難所故撃越事 の峰へ欠上り飛州勢を後より追崩セバ飛騨 工夫を廻しえびす峠へ士卒を繰廻し炭屋 洞口より寄らる、 [取太兵衛等大将として各々三百余騎 早々氏理引かへし候か 日置、 (わざ)と諸卒を伏而待居、処 其口引揚給 当口ハ長門守えびす峠ぇ撃出 而其勢五百余騎西 炭屋尾通新ヶに踏分、 餌取ハ昔」良忠が古城を へとの口上を 餌取太兵衛 然共此流小 歩

遠藤左近右衛門向らる。上ノ保口タハ日置主計

助

するとは月2しりのとういできるころといると ちの自居化の似かやしいほうとうろい ちるれてもちるちりん対示及と かっ 我かとつてはかくしかしてんだけ流い るくな地入りのかいは行者を見る まを地し後 牧は、士車を探いしばか おうかま一日を務められる時もを書 個によるであるを尾道的水路分子之本での考える。 得級力力構像書に引得後、このでとを も不要有していたがずなっているら 好きかラネサーやスりんのなれ路中 大月的北南小日夏时多軍 のは、うとり花列粉をはり地的な花経 神城でしては、七、夜年を休命はたい 書的福中多月八月万旬内後号库力 ひろううるいべきつる後なないというかい 這樣化也去了一分一人探人、同量了沙的 めでう日を調表いちののかっち生を

(傳へ云、今正会とハ故)云、そうかへり野と云之。

すみや尾峰も其後より取手が尾と号候か

今瓢が野とハひがごと伏兵ヶ野とここをゆふ)

氏理常尭引揚給へバ日置餌取も引

払帰陣せしが、粥川甚右衛門、足軽二十余日式や東京社系・ノー計作用、足軽二十余

人をしたがへ、五、七日殿(しんが)りいたし帰陣せり。其

後七郎常尭飛騨殿を頼といへ共、氏理三木

不仲。成、常尭一身として方々働出白鳥の

烏帽子山、為真の飯盛山、処之に陣城の砦

を築(き)働給へ共、盛数方にハ上ノ保御家人等に

申付られ防ぎ討ち候れバ絶(つい)に八幡メ寄メ事不レ叶

年月様移り天正十三年酉十一月廿九日

亥子刻の大地震にて内ケ嶋兵庫頭

氏理の城地ゆり崩し此急難に東七郎

常尭落命畢 (おわんぬ)。去ハ光陰如矢、慶長年

中冬夏二度の大坂御陣の戦功によつ

て遠藤左馬助常隆より此穴洞一国(慶隆の間違い

か

に鷲見弥平治保能ぇ永く下賜候れバ当

村開基山河与四郎(元祖良忠より当村の与四郎迄四十七代と云)

始岐が類

代の面々共不残追除与四郎居屋敷に

を報為了玄威教方小上一体中あ 小統見為平八保能一分下鄉北八二 常奏是海令年去、光怪的矣處長 が好るないいろうべ情に多事かけ 不中文者を充一分と一 付えるらんなでありるであるかんされてない 代のありからは上降与る局面 中を多一なれち版多年の戦切かよう 武理常美门物了八日圣 跨九七引 をとううあるなりいとしるはもりそ 通路店具八部路上的班次明多 すいたちもとほとうれるうんとろいう今から 理の妖けやり器しかを新了 至到此大地至极小下内的等庫以 神七しの郊川巷在川多将 移録をらすと多十四十 りは付与はある方の中を中南の名はす 案内のためは金を介方はできてり 打一衛的白色 ちよれこれ 五ち命 木に

案内のため残置、其外不残追立にけり)居住セリ(此時与四郎類代の中喜十郎五右門諸事

因 | 与四郎類代の氏神此時御供し

て難渋(儀)いたし候れハ其_路に元和二

年辰八月朔日再勧請し奉る

白山妙理大権現守護所

敬白

(一六一六年)

元和二

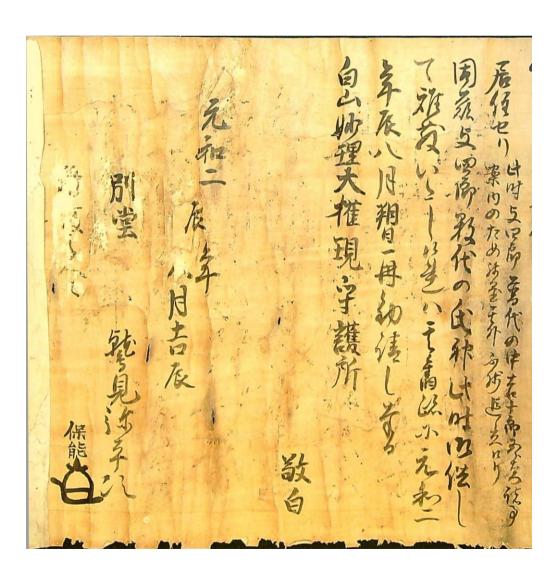
八月吉辰

別當

紫見弥平治 (花押)

この文書は高鷲町鷲見伝右衛門家に伝わる文書です。

翻刻は高鷲古文書読ままい会が行いました。子孫の鷲見尚武氏の許しを得て原本を載せてあります。



【古文書を読むために】

奉」尋(尋ね奉る) 不」残(残らず)

旧字をくずしたものですが慣れると読めます。

い (侯) り (給) み (五))・) (多・た) を (処) か (弐) か (爾・に) 大 (能・の)

ゆ (阿・あ) ゟ (より) ら (将) な (江・え) (二十・世)

今後の課題

◎なぜこの「累縁記」は書かれたのか?

◎この文の趣旨は何か?

◎地名が間違っていると強調しているけど、元のままなのは?

0 「喜八会津」とはどこか?

☆ここに出てくる地名は現在残っています。 地名は歴史と地形を知る大切な文化財です。

正会(ショウガイ) 炭屋ケ尾 住屋官林 エビス峠

瓢子ケ野 (旧穴洞白山神社跡地・次の地図によると現在の保育園の北に良忠の古城があったと思われる)

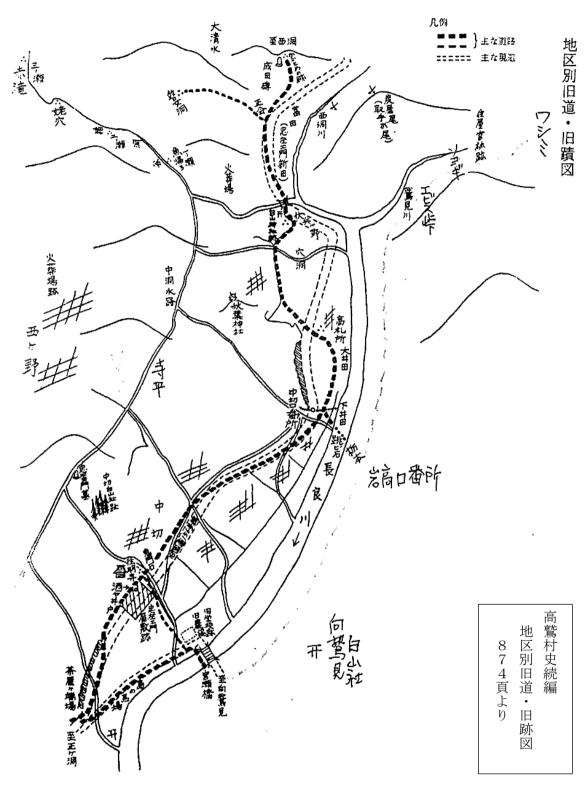
(村史続編より)

次の地図は穴洞村の古地図です。 下の中央辺りに四角で囲った部分 (山下氏と書いてあります) があります。

この西側は畑で少し高くなっており、この四角の部分が山城であったと地元の方が言っていました。累縁起の 「良忠が古城」で

す。 現在の高鷲保育園の北側にあたります。





中洞 旧道•旧蹟図